

この冊子を本の末尾に差し込むと、事件解決後の続きから楽しめます。

きみの名前は、渡守希美。通称「キミ」だ。

本が好きで、遊ぶことも好き、元気が取り柄の、ごく普通の四年生だ。

さて、町のあちこちで人形がひとりで姿を消してしまった「消えた人形事件」が解決してから1か月くらいが経った。

あの事件は、駅前広場のからくり仕かけ時計にある人形の城で起きていたんだ。そこでは、人形たちの無念さや悲しみから生まれた〈人形の王〉が、捨てられた人形たちを集めて〈人形の王国〉を作ろうとしていた。でも、きみが〈人形の王〉を説得したおかげで〈人形の王国〉と人間の世界が共存できるようになって、町は平和を取り戻した。

あれから、きみが解決しなきゃならない事件はまだ起こっていない。きみと一緒に「ふしぎ探検団」として事件を解決した神さまの「ユメ」は、今もきみの部屋に居座ったままだ。ユメの力でしゃべるようになったきみのスマホ「ツクポ」も、ふしぎなことが起こらないせいで少し退屈そうに見える。いや、事件なんて起こらない方がいいんだけど。

(ほかの章を読まないようにして、110へ進もう)

ナミさんはきみの返事を聞いて「ありがとう、キミちゃん。嬉しいわ」と微笑んだ。それから、部屋の隅に置かれていた三脚をベッドのそばに立てて、撮影の準備を始めた。

「じゃあ、まずは仰向けに寝てね。両手は横に置いて、リラックス。私が直接動かしてポーズを変えるから、自分では動いちゃダメよ」

きみはナミさんに言われた通り、ベッドの真ん中に寝そべった。ふかふかの枕が柔らかい。ナミさんがきみの右手を少し頭の方に持ち上げるのに合わせて、きみは右腕の力を抜く。「痛くない？」と尋ねられたきみは、人目を盗んで夜に動き出す人形になったつもりで、とても小さくゆっくりと頷いた。

きみが頷くのを確認したナミさんは、持ち上げたきみの手の指先を包み込むようにきゅつと丸めた。そして、左腕も同じように優しい手つきで包み込む。自分の身体なのに、きみは両腕にかかった力を自由に押し戻せなくなっていく気がした。でも、腕から力が抜けてだらんと落ちてしまうわけでもない。ナミさんがきみの身体に直接与えた指示を、きみの身体は忠実に守ろうとしている。

そして、きみのポーズを一通り整えたナミさんは、カシヤット一枚目の写真を撮った。自分

で動かうごかせなくなつた両腕りょううでを写真しやしんに収めおさめられると、きみはなんだか恥はずかしいような、怖いこわいよ  
うな気分きぶんになる。でも、優しいナミさんになら、きみの身体からだを任まかせてしまつてもきつと大丈だいじょう  
夫ふ。それに、人形にんぎょうを操あやつるのだからよく慣なれているはずだ。きみは張り詰つめていた気持ちきもちを追お  
い出すだように、ゆつくりと息いきを吐はいた。

それからナミさんは、きみの左足ひだりあしをちよつとだけ曲まげて、またカシャッ。左足ひだりあしを戻もどしたら、  
右足みぎあしも同じおなような動きうごきを繰り返く返かえす。ストップモーション・アニメーションなら、今いまはきつとき  
みはベッドの上うへで歩あるいているはずなのに、ナミさんに触さわられたところからどんどん自分じぶんの意思いし  
が抜ぬけていく。きみはいつの間まにか、その感覚かんかくが心地こころちよくなつていた。

( 120 へ )





「あら、人形になる夢を見るの？ 私も小さい頃に見たことがあるわ。とつてもすてきねえ」

きみは、「消えた人形事件」の調査中に会った人形アニメ作家のナミさんの洋館にいる。町の平和とは裏腹に、きみは最近ふしぎな夢を見るようになっていた。きみが〈人形の王〉を説得するのに失敗して、小さな身体のまま人形になってしまふ夢だ。でも、〈人形の王国〉には学校も宿題もないし、ずっとゴロゴロしていても怒られない。そんな楽な生活に身を任せているうちに、きみは自分が人間なのも忘れてしまつて……いつもそこで目が覚める。

このふしぎな夢を見た後は、きみはしばらく手足が動かなくなつてしまふ。もしこのままたくさんの人形が押し寄せて〈人形の王国〉に連れ去られたら、抵抗できないまま人形に変えられてしまふかもしれない。そう思うと、きみは少し怖かつた。

きみはユメにそのことを話したけど、ただの夢の話だからとまともに取り合つてくれなかつた。ツクポもやはり事件は何も起こっていないと言っているし、やっぱりきみの〈人形の王国〉の記憶が形を変えて夢に出てきただけかもしれない。

それで、きみはナミさんに自分が見ている夢について話すことにした。ナミさんは前に夢占いを勉強していたことがあるらしい。本棚から月や星座が描かれた綺麗な本を何冊か取り

出して、夢に人形が出てくる意味について教えてくれた。

「えーと……でも、人形になる夢って、あまりいい意味じゃないわね」

ナミさんは本に書かれた夢の解説をいくつか読み上げてくれた。自分が操られているような感覚や、感情を出せなくなっているとか、強いプレッシャーを感じているとか、そんな意味があるらしい。どれもきみの気持ちをぴったり言い当てているようにには思えないけど、少しだけ思い当たることがあった。それは、ユメのことだ。

神通力を使い果たしたユメは、一週間くらいは何もせずゴロゴロと横になっていただけ、力が回復してからはそれも飽きてきたらしい。おやつや漫画を欲しがったり、ツクポに話し相手になってもらうくらいはいいつものことだけど、最近は部屋で宿題をしているきみの邪魔までしてくるようになっていた。

今日だって、きみの宿題なんておかまひなしで話しかけてくるユメから逃げて、この人形館までやってきたのだ。きみはユメに「そんなに退屈ならお社に帰ってよ」とでも言い返したくなっただけ、そういうわけにもいかない。神さまにあんまり悪口を言うとな罰が当たりそうだし、ユメの力に助けられたのも一度や二度ではなかったからだ。ひよっとすると、これがきみが感じている強いプレッシャーってことなのかもしれない。

「その気持ちにちゃんと向き合えば、きっと解決するわ。リラックスしてね、キミちゃん」

(111へ)



人形館にきたきみは、やっとのことで今日の宿題を終わらせた。ふと、壁にかかったレトロな振り子時計を見上げると、すっかり夕方になっている。人形館の部屋は、飾られた人形が日に焼けないように昼でもしっかりと遮光のカーテンが引かれているので、時計を見るまで気付かなかったようだ。

カーテンの隙間から外を覗くと、もう空は夕暮れを深く飲み込んで暗くなっていた。住宅地の外れにあるこの洋館の周囲は、通学路に比べてとても街灯が少ない。家まではほんの10分ほどの距離でも、ふつうの四年生がこの暗い中を歩いて帰るのはちよつと危険かもしれない。前に夜中の12時の公園に行ったことはあるけど、あれだつて人形の謎を追うために夢中でやったことで、本当は危ない行動なのだ。

どうしよう、と思つてきみが外を見つめていると、ちょうど別の部屋で人形のお手入れをしていたナミさんが戻つてきた。

「ねえ、キミちゃん。そろそろお家に帰らなくても大丈夫かしら」

カーテンを閉じて振り向くと、ナミさんは少し申し訳なさそうにしていた。たぶん、ナミさんも作業に夢中できみが何時に帰るか尋ねるのを忘れていたのだろう。きみは心配ごとをずば



り言い当てられたような気がして、悲しくもないのに急に涙がこみ上げてきた。

きみは慌てて涙を拭く。ナミさんは、きみが泣いていたことには気付いていないみたいだ。「外も暗くなっちゃったし、お家まで送ってあげましょうか？」

そう言われたきみは、さつきまで窓の隙間から見ていた洋館の暗い庭のことを思い出す。人形館の庭はよく手入れされていて、昼のうちはこぢんまりとした静かなイングリッシュガーデンという印象だった。しかし、今は暗がりですくすく揺れる草花や、つるバラが巻き付いた鈍い輝きを放つロートアイアンのアーチから、なんだか不気味な雰囲気か漂っている。

いつもなら、あれだけふしぎな事件を解決したきみにとっては、なんてことない風景のはずだ。幽霊の正体見たり枯れ尾花、という言葉もちやうど学校で習ったばかりだった。でも、目尻に残った涙に気持ちが引きずられてしまったせいか、きみはどうにも心細くなってしまった。たとえナミさんと一緒だとしても、今はあの庭を通りたくないと思った。

もしユメがそんなきみの姿を見たら、「キミさんや、気持ち強く持たねばならぬぞ」なんていばつて言うかもしれない。でも、ユメはきみの部屋でまだ昼寝でもしているだろう。人形館にいる間は、いつもはよくしゃべるツクポも黙ったままだった。

さて、きみは……？

・ナミさんにまだ帰りたくないと言う (112へ)

・ナミさんに家まで送ってもらう (114へ)

きみは、もう少しここにいたいとナミさんにお願ねがいした。夜よるが心細こころぼそいからと言いい出すのは恥はずかしかったから、きみはお姉あねちゃん、ユメとケンカして飛び出だしてきたのだと嘘うそをついた。でも、ユメの方がずつと年とし上うえだから、お姉あねちゃんと呼よんだってまちがいではないはずだ。「あら、そうなの。じゃあ、今日きょうはここに泊とまっていく？　でも、お家うちの人にちゃんとおツケーをもらってからね」

そうして、ナミさんはきみが人形館にんぎょうかんに泊とまってもかまわないと言いってくれた。有名な人形ゆうめい にんぎょうアニメ作家さつかさんの洋館ようかんに泊とめてもらうと言いえば、きつとお母かあさんもびつくりするはずだ。

きみはユメの顔かおを思い浮うかべる。彼女かのじよがきみの部屋へやに来てからは、毎日まいにち顔を合あわせることになつた変へんな神かみさま。でも、ふしぎな事件じけんを解決かいけつした今はまるでわがままな妹いもうと……いや、お姉あねちゃんが出来できたみたいで、ちょっとだけ嫌いや気が差さしていた。だから今日きょうくらい、ユメから離はなれて過すごしたって罰がちは当あたらない。きつとそうだ。

そう自分じぶんに言いい聞きかせたきみは、ツクポでお母かあさんに電話でんわをかけた。お母かあさんに自己じこ紹介しょうかいするナミさんはなんだか緊張きんちやうしていて、後あとで聞きいたら電話でんわが苦手にがてだって言いっていた。



# 113

きみは人形館でお風呂を済ませて、脱衣所でナミさんが用意してくれたパジャマに着替えた。襟元に白いレースとリボンがついていて、さらには袖と裾にフリルがたっぷり盛られた水色のワンピースだ（だからネグリジェと呼ぶ方が正しい）。きみが普段着ているセパレートの薄いパジャマとはちがって、ほんの一步前に歩くだけでふわふわと裾が揺れる。まるでお姫様になったみたいだ。

さっきまで着ていた服はもう洗濯機の中でぐるぐる回っている。放っておけば1時間くらいで乾くだろう。きみが知らない匂いの柔軟剤で包まれると、どこか遠い場所に来てしまったような気持ちになった。初めて人形館に来たときも、人形を操る魔女がいるこのふしぎな洋館が、まるで山奥の古いお城のように見えたものだ。

それにしても、この洋館に暮らしているのはナミさんだけなのに、きみにぴったりサイズのパジャマが置いてあるのはどうしてだろう。服の雰囲気はナミさんが着ているゆったりしたローブに似ているけど、きみより20センチメートルくらい大きい大人のナミさんの身長ではもちろん丈が足りない。

しかし、おろしたての新品というわけでもなさそうで、きみは誰がこのパジャマを着ていた

んだらうと首をかしげた。これもナミさんの魔法なのだらうか？

着替えを終えて洋館の奥にあるスタジオに向かうと、ナミさんはまだ仕事を続けていた。きみが初めて人形館に来たときと同じように、広いテーブルに置かれた人形の位置を変えたり、手足の向きを細かく調整したりしている。ふしぎな魔法……ストップモーション・アニメーションの撮影だ。

きみはナミさんに後ろからそつと声をかける。女の子の人形をテーブルに置いて振り向いたナミさんは、きみのパジャマ姿をしげしげと見つめた。その目線になんだか緊張したきみは、思わず背筋をびんと伸ばす。それからナミさんは、嬉しそうに微笑んでこう言った。

「あら、キミちゃん。よく似合ってるわね！ 小さくなかった？」

きみは両手を広げて示しながら、ちょうどよいサイズだと答えた。それから、どうして人形館に子供用のパジャマが置いてあるのかを尋ねると、ナミさんは一瞬きよとんとした顔をしてから、「そうよね。確かに、まるで魔法みたいよね」と楽しそうに笑った。

「たまに親戚の子が遊びに来るの。だから、いつ来てもいいように小さなお客さんのパジャマを用意してるのよ」

そう答えたナミさんは、残っていた仕事を終えてからスタジオの片付けを始めた。テーブルの上に薄く透き通った布のカバーを被せたり、スマートフォンを台から下ろしたり、使い終わった小物を棚に戻したりと忙しい。きみもナミさんを手伝おうと辺りを見回すと、作業机

近くの床に何枚かメモが落ちていたのに気付いた。きっと、ナミさんが撮影中に落としたまま忘れてしまったのだろう。

きみは、ナミさんが落としたメモを5枚ほど拾い集めた。小さなリングノートから切り取られた紙に、鉛筆でイラストや文字が書き留められている。

ふとメモを一枚だけ見てみると、そこにはなぜか、きみが着ているネグリジェと同じような服の人形のラフスケッチが描かれていた。そして、手足に沿って動きを表すような矢印が引かれていた。その人形はふかふかのベッドの上に寝そべっているけど、ひよつとして布団の上でダンスでも踊るのだろうか。きみはナミさんがどんなアニメを撮るのか知りたくて、ほかのメモもこっそり読みたくなってきた。

さて、きみは……？

・ほかのメモは読まずにナミさんに渡す（115へ）

・ナミさんに気付かれないように、ほかのメモも読む（116へ）

きみは迷った末に、ナミさんに家まで送ってもらおうようにお願いした。いくら外が怖いからって、いつまでも人形館に居座るわけにはいかない。そろそろ帰らないとお母さんも心配するだろう。それに、子供っぽいわがままでナミさんを困らせたくはなかった。

でも、玄関までの足取りが重い。人形館の暗い庭を映す掃き出し窓の冷たさは、初めてへ人形の王の部屋の部屋に行ったときのおどろおどろしい雰囲気によく似ていた。きみは身体がぶると震えて、靴を履いたままその場に立ち尽くしてしまう。きみの足取りが重くなっているのに気付いて、ナミさんがそつと手を握ってくれた。

きみは大きく深呼吸をしてから、目をつむったまま外へ飛び出す。おそろおそろ目を開けると、窓越しに見ていた洋館の庭が目の前に広がっている。風が頬を撫でて、庭に生える草花が昼間と同じように揺れているだけだと気付いた。

すると、なぜかさつきまできみを支配していたはずの不安がするりと消えてしまう。人形館から見ていた景色とはちがって、外に出てみると普段の夜と何も変わらなかったからだ。どうしてこんなのが怖かったんだろう、ときみは思った。

きみは、ほかのメモにはどんなことが書いてあるのか気になったけれど、あまりじろじろ見  
てはいけないと思って、そのままナミさんに渡した。ナミさんはメモを受け取ると、描かれた  
スケッチに見覚えがあったようで、少し慌てた様子で中身を確認し始めた。

「これ、どこに落ちてたのかしら？　なくしたと思っただから、助かるわ」

きみが作業机の下にあったと伝えると、ナミさんは納得した様子でメモを引き出しにし  
まった。それから、ほかにもメモが落ちていなかったか尋ねられたので、きみは机の下にはな  
かったと答える。ナミさんの様子を見るに、まだなくしたままのメモがあるようだ。でも、床  
にはもう何も落ちていなかった。

スタジオの片づけを再開したナミさんがしばらく棚の整理をしてから、最後にテーブルを照  
らす強いライトの電源を落とすと、辺りはすっかり薄暗くなった。部屋を照らすのは廊下から  
漏れる電灯の光だけで、スタジオの奥にある人形たちの棚はもう暗闇に包まれている。

「そろそろ寝室に案内するわね。キミちゃんはいつても何時に寝るの？」

普段なら、きみが寝るにはまだ早い時間だ。でも、慣れない環境に少し疲れてしまったの  
か、きみはほんのりと眠気に包まれている。家にいるときは、お風呂を済ませたらテレビを見

たり図書室で借りた本を読んだりするけど、今日はそういう遊ぶものがないので退屈しているのかもしれない。

そして、きみはナミさんに導かれて寝室に向かった。二人で廊下を歩いていると、突然振り向いたナミさんがきみにこう尋ねる。

「さっきのメモ、もしかして中身を読んだりした？」

ひよっとして、ナミさんの重大な秘密が書かれていたのだろうか。きみは叱られないかちよっとだけ心配しながら、正直に1枚目のメモだけ読んだと伝えた。ベッドの上できみと同じパジャマを着た人形が踊っているスケッチ……なんて一つずつ口に出すと突飛な感じがするけど、まちがってはいない。

「そうそう。そのパジャマをモチーフにしたアニメを作ろうと思ってるのよ。新作のアイデアだから、秘密にしてね」

きみが慌ててうなずくと、ナミさんは安心した様子でまた歩き始めた。じゃあ、残りのメモにはアニメの続きが描かれていたのかもしれない。きみはパジャマの人形がどんな風に活躍するのか、少し気になった。

寝室に着くと、部屋の真ん中に大きなベッドが置かれている。ふかふかの枕の横や、頭の上のベッド棚にも隙間なく人形が並べられていて、ナミさんは本当に人形が好きなのだと思っ

て実感した。



「枕まくらをもう一つ出ひしておくわね。キミちゃん、今日きょうはもう寝ねちやう？ それとも、もう少すこしお  
しゃべりしましょうか？」

さて、きみは……？

・ナミさんとお話はなしたいと言いう（**118**へ）

・今日きょうはもう疲つかれたので寝ねたいと言いう（**117**へ）

ナミさんはまだ片付けが終わっていないようで、きみが床の落とし物を集めていることにも気付いていない。きみは、ほかのメモもこっそり読んでみることにした。

2枚目のメモを取り出す。1枚目と同じパジャマを着た人形がベッドの上において、しかし今度はたくさんの兵隊人形がベッドを取り囲んでいる。書き込まれた矢印によれば、かれらはパジャマの人形の周りをぐるぐると歩き回っていて、逃げられなくなった彼女は今にも泣き出しそうだ。兵隊人形はこの子を捕らえるために来たのだろうか。

今度は3枚目だ。兵隊人形の様子はさつきと同じだけど、真ん中にいるパジャマの人形の姿がちがっていた。ふつうの女の子と変わらない綺麗な顔だったのに、今は目の部分に四つ穴ボタンが縫い付けられているし、口も刺繍糸のステッチになっていて、一目でぬいぐるみだと分かるようになっていた。もともと人形アニメのアイデアだから、登場人物が人形なのは当たり前だ。でも、どうして急に見た目を変えたんだろう……きみは気になった。

ひよっとして、1枚目と2枚目の女の子は本物の人間だったけど、3枚目で人形に変えられてしまうというストーリーなんだらうか。ナミさんのメモだから人形が描かれているといのはかんちがいで、3枚目のぬいぐるみと見比べると普通の子供に見えてくる。まるで、水

色のネグリジェを着た今のきみみたいに。人間が人形に変えられる……きみは、自分が最近見る夢によく似ていると思つた。

ナミさんは何を考えてこんなメモを残したんだろう。もしかして、ウサギの人形から「人形の王国」の秘密を聞いたのかも……と4枚目を見ようとしたところで、きみがメモを読んでいるのに気付いたナミさんが後ろから声をかけた。

「ねえ、キミちゃん。それ、どこにあったの？」

突然の声に驚いたきみは、手に持っていたメモを床に落としてしまふ。慌ててメモを拾い集めようとしたけれど、たどたどしく言い訳するのが精一杯で上手く身体が動かない。メモがひらひら舞っていて、どれから手を伸ばせばいいか分からなくなっていた。

「ごめんなさいね。驚かせる気はなかったの」

そう言つて、ナミさんが立ち尽くしたきみの代わりにメモを拾い始める。屈んだナミさんはきみと同じ高さの視線で微笑むと、きみを安心させるために優しく頭を撫でてくれた。

「変な夢を見たつて言つてたでしょ。何かの役に立たないかと思つて、忘れないうちにスケッチしていたのよ」

確かに、ナミさんにはきみが見たふしぎな夢の話をしたばかりだ。彼女はきみの夢に興味を持つてくれていたし、メモを残すのも変じゃない。それなら「人形の王国」の秘密を知らなくたって、このお話は書けるだろう。でも、目が覚めたばかりのベッドに人形が押し寄せる想

像ぞうをして怖こわがつていることを、きみはナミさんに話はなしたっけ？

「キミちゃん、お片付けかたづを手伝てつだってくれてありがとう。もう遅おそいし、今日きょうは寝ねましょうね」

きみはナミさんに導みちびかれて寝室しんしつに向むかう。部屋へやの真まん中なかに置おかれた大きなベッドの周まわりには隙すき間まなく人形にんぎょうが並ならべられてる。きみを〈人形にんぎょうの王国おうこく〉に連つれ去さる兵隊へいたい人形にんぎょうとちがって、みんな優やさしそうな表情ひょうじょうの人形にんぎょうたちだ。ナミさんは本ほん当とうに人形にんぎょうが好すきなのだと改あらためて実感じつかんした。

(117へ)



# 117

それからきみは、たくさんの人形たち（にんぎょう）に囲（かこ）まれて眠（ねむ）りについた。夢占（ゆめうらな）いで出（で）ていたプレッシャーがなくな（な）ったおかげ（かげ）なのか、人形（にんぎょう）になる夢（ゆめ）は見（み）なかつた。

そして次（つぎ）の日（ひ）、いつもより少（すこ）し早（はや）く目覚（めざ）めたきみは、ナミさん（なみ）が作（つく）ってくれたトーストとスクランブルエッグ（スクランブルエッグ）の朝食（ちようしよく）を食（た）べてから、家（いえ）まで送（おく）ってもら（もら）うことにした。

（119へ）

きみは、まだ眠くないのでもう少しナミさんと話したいと言った。

すると、ナミさんは「じゃあ、ちよつと私のお話を聞いてくれる？」とベッドの端に腰かけた。それからナミさんは、棚に置かれたドレス姿のお姫様の人形を手にとって、ふりふりと人形の手を左右に振ってみせる。きみも隣に座って、ナミさんの話を聞くことにした。

「ストップモーション・アニメーションって、動かない人形に命を与えるためのものよね」

そう言って、ナミさんは膝の上の人形をさらにくるりと回した。まるで本当にお姫様が社交ダンスでも踊っているみたいに自然な動きだ。きつと、普段からこうして人形を動かして人形アニメの構想を練っているのだろう。

「じゃあ、本当は自分で動けるはずの人間を使ってストップモーション・アニメーションを撮ったら、もっと斬新な表現ができると思わない？」

きみはナミさんの言葉を聞いて少し驚く。人間ならビデオカメラの前で動いてもらえばいいのに、わざわざ何枚もポーズを変えて写真を撮るなんて、確かに斬新なやり方かもしれない。でも、なんだか心のどこかに妙に引っかかるところがあつた。

それから、きみは少し考え込む……そうだ！ ナミさんが自分の手足を操って写真を撮る

様子ようすを思い浮かべたきみは、その違和感いわかんの正体しょうたいに気付いた。まるできみが人形にんぎょうになってしまったようなその姿すがたは、ナミさんに話はなしたふしぎな夢ゆめの内容ないようと同じだ。きみはナミさんに、そのアイデアアイデアが自分の見みた夢ゆめと関係かんけいがあるのか尋たずねた。

「察さつしいわね。キミちゃん、変へんな夢ゆめを見て不安ふあんになったって言いっていたじゃない？」  
ナミさんはきみが夢ゆめの話はなしを思い出だしたのが嬉うれしかったようで、お姫様ひめさまの人形にんぎょうをまた左右さゆうに揺ゆらしてみせる。きみがこくこく頷うなずくと、ナミさんはさらに言葉ことばを続つづけた。

「それを自分で再現さいげんしてみたら、不安ふあんが薄うすれるかもしれないわ。ごっこ遊びあそびのつもりでね」  
確かにきみは、あの夢ゆめの後あとで手足てあしが動うごかなくなつたのを思い出だすたびに、なんだか重おもたくて怖い気持きもちちに包つつまれるようになっていた。でも、ナミさんが言いうみたいに、それを遊あそびのひと一つひとつに変かえてしまつたら、不安ふあんなんてどこかへ飛とんでいくかもしれない。きみは自分の膝ひざの上うえに手てを置おいてどう答こたえるべきか考かんがえた。

「ちょうど次のアニメにもベッドのシーンがあるから、私わたしも試ためし撮とりしたいのよね。キミちゃんすこがよければ、少すこしだけ試ためしてみない？」

次のアニメというのは、たぶんさつきスタジオで拾ひろったメモのことだろう。どんなアニメができるのか、きみも気きになつていた。ナミさんの新作しんさくアニメに協きょうり力りきできるといふなら、それだけで面白おもしろそうだ。きみはナミさんの誘さそいに応こたえて「じゃあ、やってみる！」と元氣げんきに返かえした。

ナミさんと人形の話をしながら住宅地を歩いてみると、すぐに家に着いた。

そして、ナミさんは玄関に出てきたお母さんとしばらく話してから、人形が描かれた角の丸いデザインの名刺を2枚取り出して、きみとお母さんに手渡した。きみとナミさんの出会いは突然だったから、名刺を渡すタイミングがなかったのだろう。お母さんは、近所にある洋館のことは知っていても、それが有名な人形アニメ作家さんの家だとは分からなかったみたいで、とても驚いていた。

「キミちゃん。楽しい話を聞かせてくれてありがとう。また、いつでも来てね」

きみはナミさんに手を振ってから、自分の部屋に戻った。

「遅かったの、キミさん。どこで何をしておったのじゃ?」

てつきり漫画でも読んでゴロゴロしているだろうと思っていたのに、ユメはきみの机に寄りかかって腕を組んでいた。なんだか機嫌が悪いみたいだ。

神通力を持って余して退屈しているところに、きみもツクポも突然いなくなってしまったのだから、そう聞きたくなる気持ちも分かる。でも、きみが家を飛び出して人形館に行ったのはユメがしつこく話しかけてきたからで、いくら神さまだからって許せないこともある。



きみも、宿題を邪魔されたときのことを思い出して「別にどこでもいいでしょ」とぶつきら  
ばうに返した。でもユメは、きみのちよつとした反撃など全く意に介さない。きみの答えを聞  
いて「おお、そうかそうか」と大きく頷いた。

「話したくないならそれでもよい。ただ、あの洋館にはもう行かないほうがよいのう。あの者  
からは何か不穏な力が……まあよい。神さまからのありがたいお告げじゃ」

そう言い終えると、ユメは読みかけの漫画を抱えていつものクッションの位置に戻った。き  
みは人形館に行ったなんて言わなかったはずだけど、やっぱり神さまには全部お見通しなの  
だろう。でも、きみを人形館に行かせまいと、神さまのお告げだなんて大げさに言ってもき  
みには全然響かない。でも、ユメのそういう子供っぽいところは、なんだか憎めなかった。

〔近所のすてきなお姉さん〕「エンド」

（その後……122へ）

ベッドの上でストップモーション・アニメーションの人形役になったきみは、まるでナミさんに操られているように手足が動かさなくなっていた。きみが人形になってしまふしぎな夢から目が覚めたときと同じような感覚だけど、きみは張り詰めた不安な気持ちではなく、ナミさんに自分の身体を任せる安心感でいっぱいになっていた。

「次は、ちよつと顔を傾けてみようかしら。もう少し、動きを付けてみましようね」  
人形に話しかけるような口調のナミさんの声が優しく響く。きみはその声に答えて頷くのも忘れて、じつと天井を見つめて彼女が自分を操るのを待つていた。……というより、人形らしくベッドに寝そべり続けた。

ナミさんの手がきみの頬に触れて、そつと頭を動かした。首の向きさえナミさんの言いなりだ。カシャツ。また一枚。視界が移つて、天井の代わりにベッドに横たわる人形と目が合う。さつきまでナミさんが膝に抱えていたお姫様だ。真っ黒な目玉ボタンに電灯の光が差して、きららとした視線をきみに送っていた。「私もあなたと同じね」と言われているような気がして、きみは目が離せない。

ベッドに転がって動かないお姫様の人形を見ているうちに、きみはまるでその人形が自分

と鏡映しになっているような気がし始めた。前に図書室で借りた怪談の本で読んだ、異世界を映すという鏡の話とおなじだ。ひよつとしたら、きみはどこか別の世界ではもともと人形なのかもしれない……そう思うと、きみはなぜかだんだんお腹の辺りがむずむずしてきた。うづくような、くすぐつたいような、変な感じがして、きみは思わず息を止めてしまう。きみが見ている夢が本当の世界で、実はきみは人形なのかもしれないって思うと、ドキドキが止まらない。ナミさんはそんなきみの様子に気付かないまま、真剣な顔で写真を撮り続けているみたいだ。

ナミさんはきみが足を上げるポーズを撮り終わると、「ちよつと待っててね」と寝室を出ていった。スタジオに何か必要な道具を忘れてきたのかもしれない。スマートフォンはきみに向けられたままでけど、シャッターが切られることはない。きみは急に息を止めていることを思い出して、首を傾けたまま慌てて息を吸って胸を上下させる。きみは人間みたいに身体が動くのがとても恥ずかしい気がした。

「これで面白いシーンになるかも。キミちゃん……あら、寝ちゃったのかしら」

ナミさんが寝室に戻ってきたけど、きみは横を向いているからまだその姿を見ることはできない。ナミさんはそれに気付いて「今は撮ってないから、顔を動かしてもいいのよ」と言ったけど、頑なに動こうとしないきみの様子を見て、ちよつと呆れたように笑いながらきみの顔をそつと正面に戻してくれた。

きみの視界にナミさんの姿が入る。ぼーっとした視線のピントをゆっくり合わせると、手には小さな兵隊の人形が何体か握られているのが分かった。赤と青の制服を着たプラスチックのおもちゃだ。ナミさんはここにこしながら言った。

「キミちゃん、この兵隊に囲まれて身動きできない感じで撮ってみてもいい？」

きみは少しびびりした。だって、目が覚めたばかりのベッドに人形が押し寄せる想像をして怖がっていることを、きみはナミさんに話したっけ？ でも、小さな兵隊に捕まるのはガリバー旅行記でも読んだことがあったし、案外よくあるアイデアなのかもしれない。

きみがまた小さく頷くのを見て、ナミさんはベッドの周りに兵隊の人形を並べ始めた。きみの腕の横に1体、足元に2体、頭の近くには3体。合わせて6体の兵隊がきみを取り囲んでいる。小さな兵隊たちは、まるでここに閉じ込めて絶対に逃がさないともいうように、きみの姿を見下ろしている。ナミさんが「続きを始めるわね」と言って、また写真を撮り始めた。カシヤツ、カシヤツ。

兵隊の人形に囲まれると、やっぱり夢から覚めたときの〈人形の王国〉に連れ去られると、きみは心臓がドキドキしてくる。指先から鼻の先まで、本当なら自由に動かせるのに、逃げたくても逃げられない感じが、やっぱりちよつとだけ怖い。きみは天井の一点を見つめてじつと我慢した。

それから、ナミさんがきみの顔をそつと傾けて、カシヤツ。また一枚。今度はお姫様じやな

く、兵隊の人形がきみを見下ろしている。相手が人間か人形か見極めるような視線を浴びているうちに、きみはまたお腹の辺りがむずむずしてきた。ゆっくり息をしなきゃいけないのに、徐々に呼吸が荒くなる。それに、じわじわと身体の中が熱くなって、なんだかお腹に力が入らなくなってしまう。

「……キミちゃん、なんか無理してない？ ちよつと休憩する？」

ナミさんが心配そうにきみを覗き込むけど、人形の視線で頭がいつぱいのきみの耳にはその言葉は届かない。

ナミさんは人形ごっこにのめり込んでいるきみを見かねて、急にきみの脇腹をくすぐってきた。全身から感情が抜けて動けなくなっていたはずのきみもたまらず「ひやつ！」と大きく叫んで、ベッドの上で跳ねてしまう。動いちゃダメって言われてたのに、我慢できなくて笑いがこみ上げてきた。

「キミちゃん、ごめんね。つい試したくなっちゃって。疲れちゃったみたいだし、ストップモーション・アニメごっこはここまでにしましょ！」

ナミさんもきみにつられて一緒に笑っている。

緊張が解けたきみはまだくすくすと笑いながら、ベッドに寝転がったまま息を整えた。お腹がむずむずした変な感じはいつの間にか飛んでいって、代わりにいつぱい笑った後のすつきりした脱力感が残っている。ナミさんはスマートフォンを置いて、起き上がったきみの横に

座すわった。

「どう？ 少すこしでも、不安ふあんな気持きもちちは薄うすらいだかしら？」

きみはうなずいて、ちよつと照てれながら楽たのしかったと伝つたえた。ナミさんは満足まんぞくそうに笑わらってから三脚さんきやくを片付かたづけて、乱みだれたベッドを整ととのえ直す。普段ふだんならもう寝ねている時間を過すぎていて、きみはまた眠気ねむけに包つつまれて始はじめていた。

自分じぶんが人形にんぎょうになるのを想像そうぞうするとなんだか変へんな気分きぶんになるけど、不安ふあんや嫌いやな感かんじは消きえていたし、きみはナミさんの人形にんぎょうになって暮くらすなら悪わるくないかもしれないなんて思おもってしまふ。きみはまだ少すこしだけドキドキが残のこっている手足てあしの感かん覚かくに身みを任まかせながら、ベッドの中で目めを閉とじた。

(121へ)

朝あさになって、きみは人形館にんぎょうかんの寢室しんしつで目を覚めました。ごっこ遊びあその効果があつたのか、人形にんぎょうになる夢ゆめは見みずに済すんだみたいだ。柵たなには昨夜ゆうべきみを取り囲かこんでいた兵隊へいたいの人形にんぎょうが並ならんでいて、自分じぶんが人形にんぎょうになりきっていた姿すがたを思おもい出だすと、きみはまた少すこしドキドキした。

「おはよう、キミちゃん。よく眠ねむれた？」

先さきに起おきて朝食ちやうしよくの準備じゅんびをしていたナミさんが、目めを覚さましたきみに気付きづいて声こえをかける。

きみはぐっすり眠ねむれたと答こたえて、ナミさんと一緒いっしょに食堂しょくどうに向むかった。ナミさんが作つくってくれたトーストとスクランブルエッグの朝食ちやうしよくは、焼やき加減かげんがちょうどよくてとつても美味おいしい。

きみはトーストをかじりながら、ナミさんに昨日きのう感じたことを話はなした。また人形にんぎょうごっこをややつてみたいと言いうと、ナミさんは少すこし驚おどろいてみせた。

「あら、それならよかったわ。どういうところが楽たのしかったの？」

きみは少すこしだけ迷まよってから、ナミさんが触ふれたところから身体からだの力ちからが抜ぬけていくのが楽たのしくて、そして安心あんしんしたと照てれながら伝つたえた。ナミさんはきみの言葉ことばを聞きいて、目めを丸まるくしていたけど、すぐにくすくす笑わらい出だす。

「じゃあ私は、人形にんぎょうだけじゃなくて人間にんげんを操あやつる魔女まじよかもしれないわね」

わざとらしく怪しい笑顔を見せたナミさんに、きみもつられて笑ってしまふ。ナミさんが魔女だとしても、こんな優しい人なら怖くないと、きみは思った。

「キミちゃんがそんなに楽しんでくれたなら、よかつたわ。またやりましようね。次は一緒にアニメを作ってみましょ」

朝ごはんが終わると、ナミさんはきみを玄関まで見送りに来てくれた。外はもうすっかり明るくなっていて、人形館の庭も静かな朝の景色のまま。きみはナミさんに手を振ってから、家に帰る道を歩き始めた。

兵隊の人形に囲まれたときに感じたドキドキも、ナミさんにきみの身体を任せられた安心感も、なんだか遠い夢みたいだ。今はこの気持ちを誰かに話すより、胸にそっとしまっておきたくなって、きみは軽く鼻歌を歌いながら元気な足取りで家に向かっていった。

「人間を操る魔法のお姉さん」エンド

(その後……122へ)





「キミさんや、何か事件はないかのう」

人形館から戻った後も、ユメは変わらないう退屈そうだ。ずっと部屋にいるから、キミが持っているマンガも全部読み終わってしまったみたいだし、誰も姿が見えないユメが一人でテレビを見ていたら、きつとつけっぱなしにしていると思われてお母さんが消してしまおうだろう。

それならやつぱりお社に帰ればいいのに、という言葉をぐっとこらえて、キミは今日のおやつクッキーを半分だけユメに渡した。ユメは「おお、感心感心」なんて嬉しそうに両手にクッキーを持ってから、今度はテーブルに置かれたオレンジジュースのストローに口を伸ばそうとする。クッキーを置いてから手に持って飲めばいいのに。こんなにだらけた神さまはきつとユメだけだ。

「わしの力なら腕の二本や三本くらい生やせるわい。でも、今日は疲れたからこのままじゃ」  
ユメがキミの注意に反発してそんなことを言い出した。

手が左右から二本ずつ生えているキツネのお面の神さまなんて、まるでゲームのモンスターみたいだ。たくさんの手にクッキーやコップを持つ、おやつ神さまみたいなユメの姿を想像して、キミは思わず吹き出してしまった。ユメはそれを見て「神さまを笑うなんてなにごと

「じゃ」とすねた顔をする。きみはひとしきり笑った後に「ごめんごめん」と謝ってから、今日の宿題に取りかかることにした。

「まあ、キミさんが楽しそうなら、それでよいじゃろう」

ユメはそう呟いてから、両手のクッキーを交互に食べ始める。それか心底幸せそうなゆるんだ表情で「おいしいのう」とニコニコ笑った。

こうしてわがままな神さまのご機嫌を取っておかないと、宿題一つ終わらせるのも難しい。こんなことなら、いつそのこと町がひっくり返るような大事件でも起きてくれたっていいのにな。……いやいや、それは流石にダメでしょ！ まるでユメと同じようなことを考え始めたきみは、ぶんぶんと頭を振ってその考えをかき消した。

……でも、事件が起きたらユメに怪しまれずに人形館に通うことができるかもしれないし、それはそれで悪くないかも。

きみはナミさんと過ごしたすてきな時間のことを思い出して、また人形館に行きたくなった。今度はクッキーでも焼いて持つていくといいかもしれない。そういえば、ジンジャーマンクッキーを作ったときの型がまだ残っていたはずだ。

（今回のふしぎ探検「人形を操る魔女事件」……無事解決？）

この作品は片桐天音によって CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。

:paw\_prints: emoji 🐾 in chapter titles is licensed under a CC BY 4.0 by Twitter, Inc and other contributors.